



✨新天地でかがやく ✨

File1：地域に貢献して謳歌する移住ライフ

澤田健人さん・佳代子さん夫妻

合同会社^{ヒコバユ}Hikobayu役員

同代表

今回から始まった連載「新天地でかがやく」。このコーナーではおもに地方の農村で活躍する移住者を紹介することを通して、将来的に地方移住を考えている人にとっての移住後の生活ヴィジョンを見据えるためのヒントとなれば幸いである。

記念すべき初回は、北海道ニセコ町で合同会社 Hikobayu を運営し、ニセコの森から生まれた人気商品・トドマツ製油の製造・販売を行う澤田健人さん・佳代子さんご夫妻にお話を伺った。青森県出身の健人さんと茨城県出身の佳代子さん。生まれも育ちも異なる二人が出会いニセコの地に根付く産業を興すまでの足跡から、今後の目標に至るまでに迫る。

〈書き手〉

北海道大学大学院 文学院地域科学研究室
修士課程2年 仲濱 会人



澤田健人さん



澤田佳代子さん

ニセコの森から
青森県青森市で生まれ育ち美容師としてカナダ・バンクーバーで四年間勤務した夫・健人さんと、茨城県取手市で生まれ育ち看護師として東京都内の病院勤務や伊豆大島の島嶼医療にも携わった妻・佳代子さん。そんな二人の共通点はウィンタースポーツ愛好家であることだ。

二〇一四（平成二十六）年のウィンタースーズン、雪質に定評のあるニセコの同じドミトリー長期滞在し、スノーボードを楽しんでいた折に二人は出会った。

共通の趣味を持ち意気投合した二人。その年のシーズンを終了後、一旦それぞれの地元へ帰郷したものの、出会ったニセコの地でも暮らしたいという希望を胸にニセコ町の「地域おこし協力隊」に応募した。そんなニセコの地に歓迎されるかのように二人は揃って隊員に選ばれ、晴れて記念の地で新生活を送ることになったのである。

地域おこし協力隊で築いた基盤

「地域おこし協力隊」とは、「都市地域から人口減少や高齢化等の進行が著しい地域に移住して、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこし支援や、農林水産業への従事、住民支援などの『地域協力活動』を行いながら、その地域への定住・定着を図る取り組み（総務省HPより引用）」である。任期はおおむね一年～三年の間で、活動内容は地域によって異なる。

ニセコ町で協力隊員となった澤田さん夫妻の場合、おもに農家の手伝いや地域イベントの運営などに携わった。野菜の種植えから収穫、町のお祭りの会場設営から模擬店運営に至るまで、「まさになんでも屋のよう」だった。

隊員活動の中で町内での人脈が順調に広がり、二人の中で移住者に寛大なニセコの地域性や人の温かさが身に沁みるとともに、都市部と比べてはるかに地域コミュニティが密であることに驚きを隠せなかったこともあるという。

ニセコ移住二年目の二〇一六（平成二八）年に二人は結婚。まだ隊員任期中の頃から「二人で何かしたい」と思い立ち、現在のHikobayuでの事業につながる、シラカバ樹皮を使ったアクセサリーやニセコ町産の木材を原料とした樹木アロマの製作・販売を自宅アパートで始めた。

Hikobayuの事業と

澤田さん夫妻の活躍

協力隊としての任期終了後、澤田さん夫妻の事業は木の切り株や根元から生えてくる若芽を意味する「藪（ひこばえ）」にちなんだ「Hikobayu（ヒコバユ）」という名のもとで法人化。二人の手で立ち上げた会社としてスタートを切ることになった。

「法人化したことで信用が高まった反面、会社経営という人生初の経験に苦労することも多かった」と代表を務める佳代子さんは振り返る。それでも健人さんの「農業以外にもニセコの自然を活用したい」という理念のもと夫婦力を合わせて礎（いしずえ）を築き、現在では二児の親として子育てに励みながら運営を続けている。

二〇二〇（令和二）年、ニセコ町は二〇五〇年に二酸化炭素を実質ゼロにすることを目指すゼロカーボンシティを宣言した。ニセコ町の、森林資源の管理にあまり力を入れていない従来の状況を、健人さんは常々「森林は二酸化炭素を吸収できる。そんな森林が町内には豊富にあるのに、活用しないのはもったいない」と感じていた。「ニセコの森林資源の価値向上」というモットーのもと、Hikobayuではニセコ町内の森林管理に日々勤しんでいる。

ニセコ町ってどんなところ？

- 北海道南西部、^{しりべし}後志地方に位置
- 人口：5,074人^{*}
（うち約5.4%にあたる275人が外国人^{*}）
- 面積：197.13km²
- 隣接する^{くっちゃん}倶知安町とまたがって道内屈指のスキーリゾートを形成し、多くの外資系ホテルが立地
- 羊蹄山・ニセコアンヌプリ両火山からの恵みとして、ニセコ温泉郷を形成

※ 2020年度国勢調査より。ちなみに日本全体の外国人人口割合は2.2%。



そんなHikobayuの主力商品は、熊本大学との連携で導入した最先端の蒸留技術で精製された、ニセコ産のトドマツ製油である。リラククス効果のある香りが自慢の精油は、室内の空気清浄のみならず花粉症対策にも一役買うということで、町内各地の観光施設の店頭に並ぶほか、大手航空会社の機内誌やテレビ・ラジオといったメディアにもたびたび取り上げられる。

さらにHikobayuでもう一つ注目す



ニセコ中央倉庫群・旧でんぱん工場での取材風景

べきは、「木育（もくいく）」という取り組みである。この木育は、地元・ニセコ小学校の児童から道内外からニセコを訪れる修学旅行生に至るまで、ニセコ町内外の子どもたちを対象とした体験型の森林教育である。町産の木材を使った工作や森林の働きを伝えるレクチャー、実際の森林を歩き実物の動植物を身近で見るといったアクティブな活動が好評を得ている。

これらの事業の他にも、ニセコにおける澤田さん夫妻の活動は多岐にわたる。健人さんは平日の早朝六時から午後二時まで林業で汗を流したのち、十五時頃からは町内の美容室でハサミを握る。また、その美容室のオーナーが所有する別荘を活用した貸別荘の運営も行っている。一方、佳代子さんはニセコ町から車で約四十分の所にある洞爺湖温泉病院で、週に一度だけ約七年ぶりに看護師としての業務に復帰した。

「育児との両立で慌ただしい日々だが、うちの子を孫のように可愛がってくれる近所のおばあさんや、町内に住む友人の外国人などの支えもあって充実している」としたうえで、ニセコでの暮らしについて「自然豊かで、外国人の住民も多く国際色豊か。人口の少ない町なので休日に子どもを連れて遊びに行っても混雑していることがなく、非常にのびのびとした環境で子育てができる点で非常に恵まれていると思います」と夫妻は語る。

ニセコ町と澤田さん夫妻の今後

ニセコに移住して地域おこし協力隊として活動を始めた当初、健人さんは「協力隊としての業務の線引きがうまくされておらず、隊員と現場側との連携体制に課題を感じた」と言う。そんな思いを現場へ届けた結果、現在では元協力隊員が務める協力隊サポートの体制が整い、行政と地域おこし協力隊の橋渡し的役割を担うようになった。

地元民はもちろん澤田さん夫妻はじめとした熱心な移住者の尽力もあり、近年のニセコは成長めざましいが、取り組むべき課題は多く残る。

「全国的・世界的にも期待を集めている町だけに、それに応えられるだけの積極的体制で町おこしにより一層の力を注いでほしい」というのが健人さんの願いである。

また、佳代子さんは母親としての立場から、子育て支援のさらなる充実とその周知・運用を課題として指摘する。去る二〇二二（令和四）年七月からニセコ町では新たに「ファミリーサポート事業」が始まった。当事業は子育てのサポートを受けた人と子育てを応援したい人が会員となり、会員同士が子育てを支え合う取り組みである。具体的には保育園や習い事への送迎、保護者不在時のベビーシッター的役割を有償ボランティアで担う仕組みだという。今後、「ファミリーサポートをは

じめとした子育て支援事業の拡充や町内の子ども増加に対応する学校規模の拡張を行うことで、より子育てしやすい環境としてのニセコ町が出来上がっていく」と佳代子さんは考える。

そんなニセコ町とともに、澤田さん夫妻自身もさらなる発展を望む。

「Hikobayuの商品を通してニセコを知ってもらいたい。そのためにも今後はデジタルマーケティングに一層力を入れなければ」意気込む健人さんは、ニセコの森を育てるとともに、環境配慮型林業を担う人材育成の重要性も訴える。「森林と共存する文化をニセコで構築することで地域貢献ができれば…」夫婦の夢は大きい。

移住し、地域課題に取り組む魅力

澤田さん夫妻は北海道外から移住し、地域おこし協力隊からHikobayuの事業主としてニセコで幅広い活動を行ってきた。その中で夫妻は地元民との幅広い交流を持ち、協力関係を築き上げてきた。

かねてより憧れていた土地とはいえ、移住当初は都市部との風土の違いやその土地独自の慣習などに戸惑いを隠せないこともあるだろう。それでもまずは積極的に地域社会に参画してみることこそが、移住先でより早く生活の基盤を作り上げてその土地に根付く第一

歩となるのだと、私は澤田さん夫妻のお話を伺いながら考えた。

はじめ分らないことだらけだからこそ、地元の人々から様々なことを教わり、そこから交流が始まる。交流を深める中でその地域の魅力を再発見するとともに、地域社会が抱える課題も見えてくる。中には長くその土地に暮らす地元民にとってはなかなか見えづらい課題もあり、そういったものは他所の土地での生活を経験したうえで志を持って移住してきた人たちが敏感に感じ取る。移住者の立場だからこそ見出せる課題が地域内で共有され、彼らが地元民と協力することで地域社会の向上に大きな貢献をもたらす可能性を秘めているのである。

愛着を持った土地に移り住み生活の糧を形成する過程で、よりよい町づくりの一端を担うような活動を起こす。移住者にとってこれに勝る幸せなことはないだろう。ニセコのさらなる発展に向けて今日も奮闘する澤田さん夫妻の姿が、地方移住に興味を持つ読者諸氏にとって移住後の生きざまを考えるヒントになりうるのではないだろうか。

謝辞 当記事執筆に際して取材にご協力いただいた、澤田健人さん・佳代子さん夫妻をはじめとするニセコ町の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。



雄大な羊蹄山を望むニセコの町並み